

拠点病院集中型から地域連携を重視したHIV診療体制の構築を目標にした研究

**研究分担課題** 千葉市内の HIV 感染症患者の受診動向と地域連携の基盤調査

研究分担者 猪狩 英俊 千葉大学医学部附属病院 感染制御部長 准教授

## 研究要旨

HIV 感染症の高齢化とその医療体制を構築するためには、拠点病院集中型の診療から、地域連携が重要になる。千葉市内の HIV 感染症患者の年齢階級別の患者数と受診行動、処方内容を分析することにした。千葉市の HIV の感染症患者の高齢化 50 歳以上の割合は 44%であり、この 3 年間では変化がなかった。千葉市内では、二つの拠点病院を中心とする患者診療が確立している。ここを拠点に地域連携の推進が可能であると考えられた。40-59 歳の年齢層では、東京依存方の受診行動をとっており、今後の動向に注目している。ほぼすべての HIV 感染症患者が抗ウイルス療法をうけており、処方薬もシングルタブレットレジメンが増加している。このような処方動向も地域連携に向けて、薬局や薬剤師間の連携にも重要である。

### A. 研究目的

HIV 感染症患者の高齢化が指摘されている。強力な抗ウイルス薬が開発された結果、長期の生存が可能になっている。千葉県内では約 1400 人の HIV 感染症患者がいる。これは、自立支援医療の免疫機能性障害を申請した患者をベースに集計したものである。

HIV 感染症患者では、心臓血管系、慢性腎臓病、メンタルヘルスなど、生活習慣に関連する合併が多いことが指摘されている。そして、その延長には介護・看取りがある。

これらの合併症と終末医療を見据えた診療体制を整備していくことが重要であると考ええる。

私どもの厚生労働科学研究では、拠点病院集中型の診療から、地域連携を重視した診療体制を整備することを検討してきた。

### B. 研究方法

千葉市障害者相談センターのデータベースを基にした調査である。千葉市内に居住する免疫機能障害の自立支援医療の申請を行ったものを対象とした。

調査項目は、年齢、性別、通院病院、現在の処方薬である。

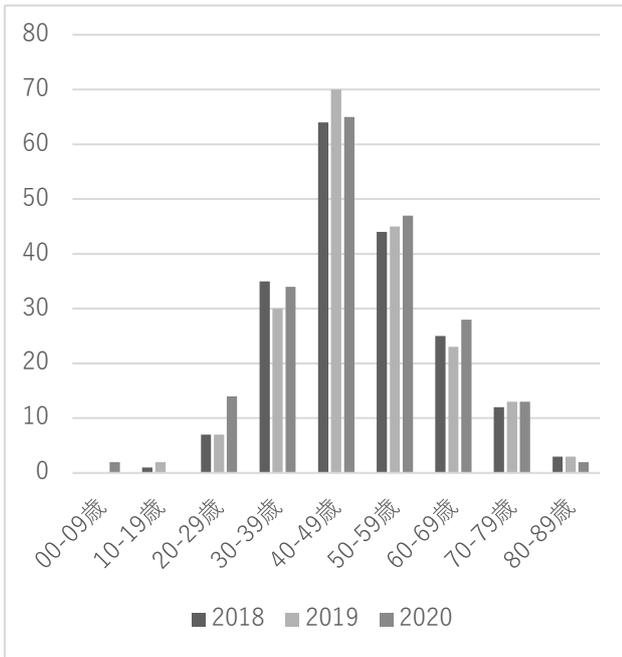
本研究の実施にあたっては、千葉市障害者センターの承諾を得た。また、千葉大学大学院医学研究

院の倫理委員会での審査承認を得た。

### C. 研究結果

#### 1. HIV 感染症患者の数の推移

	2018	2019	2020
00-09 歳	0	0	2
10-19 歳	1	2	0
20-29 歳	7	7	14
30-39 歳	35	30	34
40-49 歳	64	70	65
50-59 歳	44	45	47
60-69 歳	25	23	28
70-79 歳	12	13	13
80-89 歳	3	3	2
合計	191	193	205



千葉市内の HIV 感染症患者は 2018 年から 2020 年の間に増加がみられている。

棒グラフでみると、20-29 歳の階級で増加がみられているが、その他の年齢層において、特徴的な変化は確認できなかった。

## 2. 年齢階級別患者数の推移

	2018	2019	2020
30 歳未満	4%	5%	8%
40 歳未満	23%	20%	24%
50 歳未満	56%	56%	56%
50 歳以上	44%	44%	44%
60 歳以上	21%	20%	21%

50 歳以上の割合は 44% と高いものの、この 3 年間では変動がない。60 歳以上の割合も同様に 20% であり、この 3 年間では変動がない。

今後の状況を観察する必要がある。日本の人口の高齢化をみると、千葉市の HIV 感染症患者の高齢化の進行は踊り場状態ともいえる。

## 3. 通院する医療機関 地域比較

年別実数

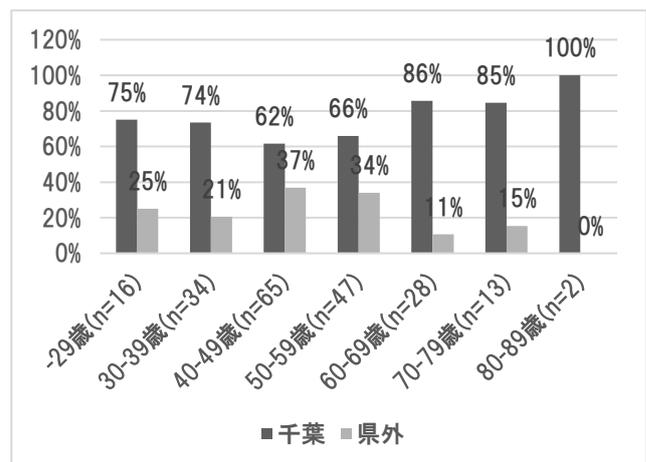
	千葉県内	東京都内	その他
2018	136	52	3
2019	139	51	3
2020	145	56	4

年別割合 (%)

	千葉県内	東京都内	その他
2018	71.2	27.2	1.6
2019	72.0	26.4	1.6
2020	70.7	27.3	2.0

千葉県内の医療機関を受診する患者が 70% である。しかし、30% の患者は、東京都内の医療機関など、他の自治体の医療機関を受診していた。

## 4. 年齢別通院医療機関の地域比較 (2020)



40 歳台、50 歳台では千葉県内の医療機関を受診する患者が低下している。高齢化に伴い、千葉県内の医療機関を受診する患者数が増加してくる。

## 5. 受診病院の詳細

年別実数

	2018	2019	2020
千葉大学医学部附属病院	83	85	95
国立病院機構千葉医療センター	35	35	32
千葉市立青葉病院	6	7	8

千葉県内医療機関	10	12	10
東京都内医療機関	54	51	56
県外(東京除く)	3	3	4

#### 年別割合

	2018	2019	2020
千葉大学医学部附属病院	43%	44%	46%
国立病院機構千葉医療センター	18%	18%	16%
千葉市立青葉病院	3%	4%	4%
千葉県内医療機関	5%	6%	5%
東京都内医療機関	28%	26%	27%
県外(東京除く)	2%	2%	2%

千葉県内の医療機関を細分化解析した。千葉大学医学部附属病院と国立病院機構千葉医療センターはエイズ診療拠点病院になっている。この2医療機関で60%強のHIV感染症患者を診療している。

#### 6. 抗HIV薬の処方の変移

	2018	2019	2020
デシコビ	87	100	94
テビケイ	48	54	57
アイセントレス	47	46	38
ビクタルビ		5	28
トリーメク	27	28	27
ゲンボイヤ	27	23	20
エプジコム	26	21	19
ノービア	21	16	14
ストックリン	17	13	12
プリジスタ	15	12	12
レイアタツ	5	5	4
エジュラント	4	2	3
エピビル	4	2	2
オデフシイ		2	2
カレトラ	2	2	2

ジャルカ		2	2
ツルバダ	10	3	2
プレジコビックス	2	1	2
コンビビル	1	1	1
スタリビルド	1	1	1
コムプレラ	2	2	
ビリアード	1		
レクシヴァ	1		
レトロビル	1		
未治療	2	1	3

#### 7. 抗HIV療法の実施状況

	2018 (n=191)	2019 (n=193)	2020 (n=205)
抗ウイルス療法	189	192	202
%	99%	99%	99%

抗ウイルス療法はほぼすべてのHIV感染症患者で実施されていた。

#### 8. STR(シングルタブレットレジメン)の実施状況

	2018 (n=191)	2019 (n=193)	2020 (n=205)
STR	57	63	80
%	30%	33%	40%

この3年間では、STRの処方が確実に増加している。

#### D. 考察

HIV感染症患者の高齢化は、50歳以上は44%と高い状態が続いている。日本の高齢化を直視すると踊り場状態である可能性がある。今後も引き続き、HIV感染症患者の年齢変化を分析していく必要がある。

受診医療機関は70%が千葉県内、30%が東京都内などの県外であった。年齢階級別には、40-59歳で

は東京依存型の受診行動をとっている。しかし、前後の若年層と高齢層では千葉県内に回帰していた。

千葉市内の受診医療機関をさらに分析すると、千葉大学医学部附属病院と国立病院機構千葉医療センターを受診する患者がおおよそ 3 分の 2 であった。これらの医療機関を中心に、地域連携の基盤を整備していくことが可能であると考えられる。

また、処方状況を分析した。ほぼ、すべての HIV 感染症患者在抗ウイルス薬の処方を受けていることが判った。

さらに、近年は STR の抗ウイルス薬が開発されてきている。STR の割合は増加傾向にある。高齢者や基礎疾患を有する患者では、抗ウイルス薬以外の処方があり、服薬管理が難しくなる。このような STR の普及は、地域連携においても重要になってくると考えられた。

#### E. 結論

千葉市の HIV の感染症患者の高齢化 50 歳以上の割合は 44%であり、この 3 年間では変化がなかった。

千葉市内では、二つの拠点病院を中心とする患者診療が確立している。ここを拠点に地域連携の推進が可能であると考えられた。

40-59 歳の年齢層では、東京依存方の受診行動をとっており、今後の動向に注目している。

ほぼすべての HIV 感染症患者在抗ウイルス療法をうけており、処方薬もシングルタブレットレジメンが増加している。このような処方動向も地域連携に向けて、薬局や薬剤師間の連携にも重要である。

#### F. 健康危険情報 なし

#### G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 猪狩英俊 他 千葉県内の HIV 感

#### H. 知的財産の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし